



春情戀延深分解
二編
上

二篇揃全六冊
第三言六号
二全三冊
別紙に枝料等
大坂心齋橋筋淡路町六
田重介

へ13
2937
4



草のあはれなき我さへうたがふはなほおぼろにかくるわ
人のゆるげゆく背戸の障子を張てんと賤の緒環う
返しつゝあめといふぞ閑い身は直は後ぞかたのちよと
浦の濱あふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
詞の花も八重のくゆる成二編の條と云をきくくくくくく
画匠ハ例の豊國がうたへん秘藏の教する國富ぬ
お丹情と仕立の美をも綴文の數もいひくくくくくく

おさるれき僥倖次篇も梓お最中よりあむ
おさるれき三輪お山本ありそくく十市の里お遠
おさるれき發達おそくとおさるれきとておさるれき

庚申の季秋

朧月亭有人誌





鎌倉喜瀬川町の
商人花澤屋
彦三



白雲や
角よ月分り
さつちり
雪中茶

伊達屋の
番頭
八藏

與四郎が妻
於重



○伊達屋
花雪
伊達屋
花雪
伊達屋
花雪



我
秋
嵐雪
○柳川岸の
唄女小金



春色戀染分解二編卷之上

江戸

朧月亭有人作

第七回

男
「オオ内室さんおめ人も大概圓いみのねのんぞせ
死あふと思入西天お経自色がそくよはつとをわいて
わすれバとそふだよ命も助うぬくおしと自己が
来るといふのりぞ他生の縁とせうざらふとあふ
と思やアおめもとまがおめ人の横徳入繪心由実

どちあいのう様あうりやを家う 是とて電サ余ッて格さ
百本の急の付のぬ腹のせふ出又庵丁の生づりドリヤ息の
多様あやうとの入所ぐおねのりおねノイお内家さん
よおねあやせう 女房ああるあうねハ其あてたッて一夜
いふと我様おねおねスリヤおね人のあてとりの入所と送ッて
からうぐまの種うネいをたかちやううねトとッて
とあうりよまればおねの格終者やせん南やせんとなあ
らひーぐなまふふあーとむとまづあーきほまあハ

おねのうらまはしむがたあてと先様依りてとてあて
今ゆらうちがどどらうませう一疾ぐあいの懸るおね人け
おねの抱あひのまよりハおねの中うまのめでも格終を替て
さへいさうまはハおねああがひませう格終おねの中を
由仲人あへハツイお互の我様うら電おのつた
てがあのともの人ませんあらうてあうそん人ハ
合点先おねおねそんあうあね人のの今も任せ格終
人といまやせうちよっううねて来るあてとあて由入まて

あそらん移人と云ふ所が揚屋の初まは人火海のし出ふ
茶のあるが茶屋のじがあらうくう及古紙みせゆんを
あらしむヨドリヤ下をりほつて来るうくト出中海よ
ホット息むらうつぐあやうあはしあま中助うん
死ぬ由揚ううた若芳うのるあまと述出て主人あつふ
あづきんと身あうあへつさんみ川の辺へ来しお件
一八遊舟の標發つるんを引たせし
るの目由換ゆる一八枚紙なましあままうあなりや

被さかゞまて生して重く人の茶と海あさはあうが
教して後いせよまると茶をかあて教くお打あやま
せバ声をうたて「たえお打りあうが教さるあうが己が
あうる文憑人のあんであまあう人お服このあめ
あめあう今あ思ひあうせんと魚を下る暇成と園ま
さもく甲さうあのもまバ「云してあけがまうあ
えんを料理成まうのが極サあまうくく云アつけう
え下げ果する下賤あめあまのあうああしんてきうと

何と初るまじつちやぎんをなすまふうたう茶入とや
が横濱河辺のさる茶屋ふ七十を運入するもの入
松多間中くが不願あぐり様成持て擇むる者盤の
茶のむりふあふひさぐりや年身と賣て金成細い
茶入紙詰且好さるの身の入とせり明々あま
今此とあげてたぬよういさる場つと負せとせうと及
まあぐ思ひ中七縁あまをそは紙書とよと中由
は後のが後でお月ふかるといふ由らるるに依

づき金子六玉川の具船のかまの雨と本舟孫
中てある渡りのくませう入うさるお世後な中う
まが人の恋氣と痛く中むが生息つて人の私病
独以思事成あまのや一は後との紙紙切そとむ
考君八且好とのめかをたをはわ入もまに茶茶入が
横濱河とやう不願よ運入して居ると中由唯今中
人を運のは業小遠いへさるまふまの一度あうは二
ま由死あうと免怪成扱あう身のう入は後やうあ



茶会

名ドククニツ月がゆりくつてあてもたじやんらのとるつる
 「なごうほうふあ文あどアア小万さん」 「まぢやね
 そのまゝ
 手渡りてそをゆくたよりが使るとあてくまゝ
 向ふの一番名ドを今夜でも一ッあよアアト
 糸いそだごう「アアお夏さんもお夏ヨ」 「まぢやとち
 の名ドをとうと物でも外よ物う出あさかうごと
 「さう移入て残ちるさんさ」 「ようばいりまア子
 さうおああすのヨさしして移よのうひらの買てかえ

ぬすのトトかんぐくもど移のやアあいのご子ト
 中のいごう海へののごナヤ 何残ちるとおどが
 のおあもモウひら「おあトあのくあひのくおひよ
 ありのうし残ちるさう「まよのまごくよとあがるさあを述ん
 もんごく「たれバ唯その國をばあよさる」ね

あんでのあふああう	あてらまア
ちだごかうご	りまアくおあまの
まご移入やああひ	あふばこそ
のご子	小万

此合正上十五

つ電ちつちく命由
中いふ 女

あつん登の

りひちちつね
女

丁度り

あつたよりが
きつふい 小石

りいが
何るよ

今秋ゆふ一雨
婦い 女

さうらうま
りひちちが

女主人
「よくえんみ大さづき」
万さんそのふが南つらゆあまね下
よりはらがあつておまきア
「さうらうま」
「あつたよりが」
「きつふい」
「今秋ゆふ一雨」
「婦い」

のどヨ
か橋への過らよた橋でこのが何より
さん沖のい出茶ませんぜ
ふつこあ
ひより心自由よあようとりふのい押がつよ
私さう母をあらんむなる工もあつらうと
おめん雅うふ志やうらまこの
あつちやうならうらうらま
「さうらうま」
「あつたよりが」
「きつふい」
「今秋ゆふ一雨」
「婦い」

